黄道周注断『広名将伝』考

河内利治

一、問題点の所在

黄道周の撰著に『広名将伝』二十巻がある。道光二十九年刊本が、清の潘仕成輯『海山仙館叢書』に収められている。また崇禎十六年刊『広百将伝』（『新鐫旁批詳註総断広名将譜』）という十冊本も流布している。この両書は、はたして同一本なのか、それとも別本なのか。『広名将伝』または『広百将伝』を、黄道周は何のために著したのだろうか。本稿では、これらの疑問点を解明してみたい。

テキストとして、『広名将伝』は、孟冰点校・書目文献出版社一九八六年十一月発行本を、『広百将伝』は、崇禎十六年刊十冊線装本（個人蔵）を使用する。

二、『広名将伝』と『広百将伝』

書目文献出版社本『広名将伝』の出版説明に次のような解説文がある。

「『広名将伝』は明末の著名な学者、大臣の黄道周が注断したものであり、すなわち宋人の張預の撰『百将伝』を、陳元素が『名将伝』に改編し、これを基に作った増広輯評本である。本書は史書の伝記から、周から明までの歴代名将百七十数人を選んで記録し、その事跡を述べ、その功過を評し、その作戦の得失を考究し、韻文の断賛を加えたもので、読者を啓発するところがある。これは古代の軍事を理解するための生き生きとした入門書とすることができる。清代と民国に重刊重印されたが、ともに点校を経ておらず、ままに錯訛があり、閲読に不便である。今、孟冰同志が点校を加え、史書に異同のあるところや文章の繋がらないところを個別に訂正し、重排印行することにより、読者の手助けとなることを期すものである。原文には農民蜂起に対する侮蔑的な呼称があり、読者は注意を要する。点校は道光

刊本に依拠し、これに基づき発行した一九三七年商務印書館排印本を参考にした。」

この解説文に拠れば、宋人の張預撰『百将伝』が最初にあり、張本をもとに編まれた明人の陳元素『名将伝』があり、さらに陳本をもとに編んだのが『広名将伝』であること、さらに清代に道光刊本があり、それに基づく一九三七年商務印書館排印本があることが判明する。

それでは、張本や陳本はどのような形態の書物だったのだろうか。書目文献社本三六六頁〜三七一頁に収録する、楊揚氏の「黄道周和『広名将伝』—『広名将伝』点校本跋」文の「二、『広名将伝』是怎様的一部書」に、版本に関する詳細な考証があるので、全文訳出しておきたい。

『広名将伝』は、ある一人の人間が書き上げた兵法の著作ではなく、史書より伝記を集めて評断を加えた伝記の読み物である。いくつかの王朝を変遷し、数時代の人物を渉猟しており、文人と武将が独力あるいは合作により編集、増補し、何度も刊行されたものである。この書物はなぜ『広名将伝』と呼ばれるのか。もとの『名将伝』の姿はどうなっていたのか。『名将伝』の依拠した書物は何なのか。これらの問題は本書を読む時に当然提起されるものである。これらの問題を明らかにすることは、読者が本書と他の本との相違点を理解する上でも有用である。

本書の淵源から言えば、最も古く出現した書物は『百将伝』といい、宋人の張預が史書の各伝から集めて成ったものである。張預、字は公立、東光の人で、詳細は待考を要する。宋代には異民族の侵入に抵抗する必要があり、この書が編成されたことと明らかに関連する。しかし、原書の宋版本は現在見つかっておらず、また張預が残した序跋類も残っていない。北京図書館は明代早期から万暦年間にかけての二種の『百将伝』に節評をなした書物を所蔵しており、これは張預の『百将伝』の大凡の姿を保存している。

明早期の刻本の一つは、『正百将伝』であり、『新刊官校批評正百将伝』と全称し、東光張預公立集、東浙趙光裕克栄評、金陵周曰校応賢刊と署名する。これは大字本で、刻も装丁も精美で、黄綾で封面を作り、十冊に分装し、首冊と第四、第六、第九冊を欠き、残る六冊が現存する。各伝記に眉批があり、伝末に「孫子曰」で始まる小段の評語があり、『孫子兵法』の文を引用し、人物の行跡と結びつけて評論するが、まだ黄道周が後世に作った韻文の断賛は無い。評語は多いものは数百字に及び、少ないものは数十字、さらには『孫子兵法』の文を引いて僅か二句のものさえも

ある。趙光裕の生涯も不詳である。

明早期の刻本を継承したものが「万暦本」であり、『正続百将伝評林』と称し、扉頁に「張陽泉先生評」の刻があり、正文の前に、宋東光張預集録、明六安張澡節評と署名し、十冊に分装し、保存は完全である。この本から、張預『百将伝』の大体の姿を見ることができる。巻一は周斉太公（呂尚）など十人、巻二は趙奢など十人、巻三は陳湯など十人、巻四は王覇など十人、巻五は朱儁など十人、巻六は周瑜など十人、巻七は謝玄など十人、巻八は于謹など十人、巻九は李靖など十人、巻十は李光弼など十人、最後は五代の劉嗣である。全書の収録人数は、ちょうど総計百人である。この本と趙光裕本が異なるのは、「孫子曰」の引用文と評語の後に、「評曰」ではじまる一段の評語があることである。このことから、この本は趙光裕評本を継承し増補改訂した書物であると説明できる。

史料に拠れば、張澡は、字は子新、陽泉は恐らくその号であり、六安の人である。六安衛指揮の官職を世襲し、功績を積んで参将に至り、浙江に前後十年駐留し、倭寇を取り締まって功績をあげ、征蛮将軍印を授かる。粤西を鎮圧し、剿撫を兼ね施し、尋いで南京都督を以て致仕した。この人は対内の用兵と対倭の用兵ともに軍功のあった戦将であり、戦事の経験を総括し、兵法研究に潜心し、長い年月を費やして、『百将伝評林』を編成した。本書の前に万暦十一年（癸未）、即ち一五八三年櫻寧子王宗の「鍥『百将伝節評』引」があり、張澡の貢献を肯首している。「引」の作者は、『百将伝』について次のように言う。

伝は宋の東光張氏より作り、成周自り昉まり、下は五季に逮び、凡そ百人、人各一伝、已事を取りて『孫子』と相符号する者は之を伝末に附す。故の薦紳先生の類を以て之を侈譚す、何ぞ況んや武冑をや。総督の張陽泉は尊大人の儆庵方岳公の家学を纘ぎ、両つながら武科を占む。間嘗て即ち伝中の大体に関する無き者は節して之を刪り、評するに独見を以てするなり。

さらに彼は、次のように考える。

節なれば則ち簡、簡なれば則ち濫れず。評あれば則ち核あり、核あれば則ち晦からず。後学をして巻を一たび展ぶら俾めば、間善政を道くこと蒼索を別つが如く、図を按じて驥を索むるに至らず。其の功は作者に倍して多く、詎んぞ徒に焉を述ぶるのみならんや。藉ひ今諸将の実を檃括して節ならず簡ならず、十三篇の評語を歴証して評あらず核あらざるも、其の濫りにして且つ晦なる弊を免るるや未やと謂ふなり。

また、節評を読んで、陽泉の「文武并用し、翩翩として古の儒将の風ある」を知り、陽泉の既に能く書を編し、能く身体力行するを知りて、「独り空言を節評せざるのみ」と言っている。これは文官と武将が合作して『百将伝』の評本を推し広める努力をした記録の一種であると言いうる。

北京図書館は別に『十七史百将伝節評・正続百将伝評林』と名づけられた、上述の張溥節評本と同一の版本を所蔵するが、これは三冊に分装する。材料が他にあって何喬新がかつて『百将伝』を編訂した事情にも言及するが、原本を探し得ない。総じて、これ以前の明刻本の各本は、張預の『百将伝』を襲う名称と体例であると言える。

明の天啓三年（癸亥一六二三）に、陳元素によって『百将伝』を増補する新刊本が出現した。それは名将の収録人数が百人に止まらず、そこで『名将伝』と改名した。これが『広名将伝』の前身である。黄道周の労作という性質を理解する上で、この『名将伝』は直接対比できる書物である。陳元素の原本はまだ見つかっていないが、『広名将伝』の早期の版本には、陳元素の「増補『百将伝』序」を留めており、情況を理解する上で重要な証拠となる。陳氏の原序は次のように言う。

頃余既に『武経』を校して之を梓し、客、尚并びに『百将伝』を梓せよと謂ふ。私かに丈人より而下の勝国に至るを臧しとするを怪しむ。其の間に禍乱の時有り、英雄代に生まれ、将才の尚数を僂指するに勝へず、寧んぞ僅に此に止まらんや。会ず須らく廿一史を繙き更に之を捜すべし。而して客待つ能はず、仍て旧本を以て標目せんことを請ふ。而して我が明に於て、李温陵江の編を君（或ひは当に据に為るべし）取して稍之を進退す。総じて之に題して「名将伝」と曰ひ、言は百に止まらざるなり。之を医を以て譬ふれば、孫呉の諸篇、岐伯・黄帝の問対なり。将伝は、扁鵲・太倉の行事なり。此れ神聖なりて、病を治すに未だ嘗て方を立てず。医の方有るや、工を雇ひ人を殺すの兵刃なり。今夫の火牛・背水は、水（事）の事再び践むべけんや。故に『名将伝』は読まざるべからず、郵も著し読まざるべからず。彼の馬の君の子に服すは鑑みるべし。

この一段の序文は、陳元素という当時著名な文人が、兵法の書物と名将の伝記を編輯刊行した情況を物語っている。

史料に拠れば、陳元素は明代の長洲の人で、字は古白、諸生である。彼は詩文に工みで、また書画を善くし、画は墨蘭が著名。[2] 書法は歐陽詢の体を宗とし、草書は二王（王羲之・王献之）の韻致を得ている。彼は当時の文人との交

遊が非常に多く、卒して後、友人から貞文先生と私謚されている。彼が政事に従事し兵を用いた事跡についての文字記載は無く、兵法と名将の伝記書物の研究者であり編輯者であるにすぎない。「序」には、彼がかつて自ら『武経』を校訂し、また刊行に力があると見られる客の要求に応じて、急いで『名将伝』と改編したと書いてある。また「序」に、李温陵江の編に従い、明代の名将を斟酌して補ったとあるが、これは李贄の『続蔵書』のなかで関係する明代の名将の伝記部分からいくつかの材料を探し出したことを指す。以上から分かるのは、陳元素が、文史の書に精通し、武学の書を熟知し、『名将伝』の体制の確立に貢献したということである。しかし彼は実際の用兵や兵事への参加といった経歴が無く、加えて時間の切迫により、改編した書物の刊行後、黄道周をして不足の箇所が少なくないと感じさせ、社会の需要に適応するように再度加工することを決心させたのである。

このような情況により、『広名将伝』の早期の版本の命名にも変化があったのである。北京図書館の現所蔵本から見ると、異なる名称がつけられている。

一つは、崇禎十六年「新鐫旁批詳注総断」本で、『広名将譜』と呼ばれる。二十巻あり、百七十数人の伝記で、六冊に分かれ、黄道周注断の署名がある。もう一つは、「新鐫綉象旁批詳注総断」本で、『広名将伝』と呼ばれる。伝記の正文と断語は右書と同じだが、批注の詳略に差異がある。古閩黄道周石斎注断、長洲陳元素孝平原本、後学周亮甫猷庵増補の署名がある。この本は陳本の原序を増収する。後部にまた明代の名将湯和、胡大海、郭英、康茂才、山雲、余子俊、周金、胡宗憲、劉顕、劉綎などの十人を増加する。しかし簡略な伝記を附すだけで、評批がなく、また黄道周が先の百七十人に書いた四字句の韻文の断賛もない。その断賛は黄道周の労作のなかで最も特色のあるものである。体例が同じではないことから、『広名将伝』に対する完全に整った著述としての増補とは見なせず、ただ附録材料にすぎない。この本と崇禎十六年本を比較すると、その特色は二十幅の木刻人物図を附すことにある。そのうち、画題があるのが十八幅で、二幅は画題が欠けている。後学によって材料が補われたことから見ると、たとえ書物の前部に用いられるものが崇禎十六年の原序であっても、おそらく黄道周が殺害された後の刻本であろう。

現在、点校者（孟冰）が依拠する『海山仙館叢書』所収本は、清の道光二十七年（丁未一八四七）に、清の宗室で両粤使者であった耆英によって刊行されたものである。こ

れには耆英の「新鐫『広名将伝』序」があり、この書物を刻印した経緯が述べられており、黄石斎の原本を重視したことが読み取れる。かつ趙恰山・潘徳畜が参加して重刻を準備し、本書を『海山仙館叢書』に納めたいきさつが述べられている。この序文は、古代と清代との軍事情勢は、「同じくして異なる者有り、異なりて同じき者有り」、「古に泥(なつ)む者は智からず、古を蔑(ないがしろ)にする者は法無し」と考え、本書の名将伝はまさに「其の伝ふべきに由りて以て其の伝はざるを悟る」べきであることを読み取るよう提起しており、十分な見識がある。このことは黄道周の労作の成果が、この時代においても依然として大きな影響を与えていることを物語る。

同治年間になると、丁日昌が『百将図伝』を編輯した。これには李鴻章が同治九年（庚午一八七〇）に書いた序がある。編者は自序に上述した幾つかの書物について、

謹んで案ずるに、『四庫・兵家・将苑』一巻は、旧本に諸葛武侯撰と題す。『百将伝』一百巻は、宋の張預の撰なり。『広名将譜』十七巻は、撰人の姓氏を著さず。『百将伝』は太公に始まり、劉鄴に終る。伝末に行事を綜論し、『孫子兵法』を以て之に比合し、説を立て浅きを迂とす。『将苑』及び『広名将譜』は則ち又坊肆の依託にして、三書は均しく存目を列するも、未だ善を尽くすと称へず。（傍線訳者）

と述べている。また後部には、編者自身が練兵のために、『百将図伝』を編して、「軍人をして原に投ずるの余暇を以て、転た相講説せしむ」と説明する。その実、明代に編された類似の書物、たとえば明刻『諸史将略』十六巻、劉畿輯などのように、彼（丁日昌）が提起していないものもある。彼はすでに『広名将譜』などを提起するが、『百将伝』の巻数は現存本と異なる。人が数えた巻数には出入りがあると思われる。彼が眼にした『将苑』及び『広名将譜』は、存目か、坊肆から出版された簡本、または残本かであり、その本も黄道周の姓氏を記していない。しかし彼の『百将図伝』は、やはりこれらの書物の影響を受けて編成されたことが明らかである。

民国になると、近人の新編『中国名将伝』のほか、北京に刁広孚と名のる者が、黄道周が『広名将伝』の中で百七十数名の名将に対して作った韻文の断賛の文字を輯録して一冊に仕立て、『武学叢書』の一種に列した。輯者は「小引」で、彼が読んだのはまさしく『海山仙館叢書』本の『広名将伝』であると言っている。彼はこれらの断賛は、「各名将の名を立て功を成すの要に于て、之を言ふこ

と甚だ備はり、且つ均しく韻語を属し、尚誦習に便なり。志有りて将為らんとする者、倘し細かに之を諷んずれば、必ず得る有るなり」と考えている。今日の文献を利用する角度から見れば、将たる者と将ならざる者と、異なるレベルですべてその中から教えを受けることができる。

以上が全訳文であるが、書物の伝来を整理すると次のようになる。

①宋・張預（字は公立、東光の人）撰
『百将伝』。伝来せず。張預の伝記は不詳。

②明・趙光裕（字は克栄、東浙の人）評
『正百将伝』（『新刊官校批評正百将伝』十冊）六冊現存。北京図書館蔵。明早期刻本。眉批あり。各伝末に「孫子曰」の評語あり。趙光裕の伝記は不詳。

③明・張澡（字は子新、号は陽泉、六安の人）節評
『正続百将伝評林』十冊。十巻。完本。北京図書館蔵。趙光裕評本を継承し増補改訂。万暦十一年（癸未一五八三）櫻寧子王宋の「鍥『百将伝節評』引」あり。「孫子曰」の評語の後に「評曰」の評語あり。

④明『十七史百将伝節評・正続百将伝評林』三冊本。北京図書館蔵。③と同一本。何喬新編訂『百将伝』に言及するが伝来せず。

以上は、①を襲う名称と体例である。

⑤明・陳元素（字は古白、諸生、長洲の人）
『名将伝』天啓三年（癸亥一六二三）刊本。伝来せず。①『百将伝』を増補改名。⑥bに陳元素の「増補『百将伝』序」あり。

⑥明・黄道周『広名将伝』（二系統あり）
a 崇禎十六年「新鐫旁批詳注総断」本
『広名将譜』。二十巻。百七十数人の伝記。六冊本。
b「新鐫綉象旁批詳注総断」本
『広名将伝』。伝記の正文と断語はaに同じ。批注の詳略に差異あり。陳本の原序を収める。明代の十人を増加するが、簡略な伝記のみで断賛もない。二十幅の木刻人物図を附す。黄道周殺害後の刻本。
＊『四庫全書』所収『広名将譜十七巻』[3]
＊『海山仙館叢書』所収『広名将伝』
清道光二十七年（丁未一八四七）。耆英刊行。耆英「新鐫『広名将伝』序」あり。
＊『武学叢書』所収『広名将伝』北京・刁広孚の輯録。

⑦清・丁日昌編輯『百将図伝』
李鴻章序（同治九年、庚午一八七〇）あり。

⑧民国・近人新編『中国名将伝』

以上から、『広名将伝』と崇禎十六年刊『広百将伝』（『新鐫旁批詳注総断広名将譜』）は、同一本（正確には二系統の一本）であり、崇禎十六年刊十冊線装本（個人蔵）の『広百将伝』は『広名将譜』であり、冊数が異なるが、⑥a系統の本であることが判明した。

三、『広名将伝』の原文例

本稿では、『広名将伝』の原文全てを読むことは不可能であるので、僅かに巻一冒頭に収める「呂尚」から、その全文と「断」および「批注」を一例として挙げておきたい。原文中の〔　〕が黄道周の批注である。[4]

呂尚者、東海の上の人なり、本姓は姜、其の先祖の呂に封ぜらるるに従ひ、故に呂尚と名づく。字は子牙。尚は経天緯地の才を抱き、嘗て著して「六韜」有り、備に陰陽を言ひ、以て兵書の祖為り。時に商紂の暴虎に値ひ、避けて東海の浜に居す。石磯に坐し、釣絲を垂る。餌釣を設けず、鈎を曲げず。〔已に仁義の兵法を寓す。〕毎に言ふに、「魚鱉を釣らず、独り王侯を釣る」と。人多く之を笑ふ。困窮して老ゆ。西伯の賢にして善く老を養ふを聞き、遂に往きて帰る。岐州に入り、復た蟠渓の上に釣る。西伯を干めんと欲するに、西伯は羑里自り帰る。憂ひて将に猟に出でんとす。命じて獲る所有るや否やを卜す。卜す者曰く、「獲る所は龍に非ず彲に非ず、虎に非ず羆に非ず、乃ち王覇の輔なり」と。西伯喜びて猟す。果たして太公に渭の陽に遇ひ、与に語り、大いに悦びて曰く、「吾が先君太公嘗て曰ふ、『当に聖人の周を興す有るべし』と。子は其れ是れなるか。太公の子を望むこと久し」と。故に又号して「太公望」と曰ふ。載せて与に俱に帰る。時に年八十有二なり。立てて軍師と為す。教へを請ひ、太公対へて曰く、「国を為すに三策有り、天を敬ひ民に勤め賢に親しむのみ」と。〔兵法已に此に尽く。〕西伯之を善しとし、尚と陰に謀り徳を修め以て商政を傾けんとす。其の事、権謀と秘計多し。〔徳は尚敢て明らかに修めざるも、事殷んに至る。〕「詩」に文王の密（密須）を伐ち、崇を伐つを称ふるは、皆太公の謀なり。是の時、天下三分し二を有す。西伯、事殷んにして改めず。武王の位を嗣ぐに至り、紂は王子の比干を殺し、箕子を囚にし、其の悪愈甚だし。武王方に文王の業を修め、太公を尊び、「師尚父」と為す。鷹

揚として東伐するに、太公因りて左に黄鉞を仗し、右に白旄を秉り、以て衆に誓ひて曰く、「蒼兕よ蒼兕よ、爾の衆庶と爾の舟楫とを総べよ、後れて至る者は斬らん」と。遂に兵を盟津に観す。諸侯期せずして会する者八百国、皆「紂は伐つべきなり」と曰ふ。武王之をトし、亀兆は「不吉」なり。風雨暴に至り、群公尽く懼る。武王還らんと欲するも、太公力めて之に強ふ。遂に前んで商に克つ。既にして商に克ち、武王遂に師尚父を斉に封ず。故に後の兵を言ふ者、皆太公の「六韜」を宗とし本謀と為す。

断に曰ふ。

太公尚父、覇王の輔なり。漁猟し以て帰り、徳を修め武を用ふ。学は陰陽を擅にし、韜は竜虎を分つ。黄鉞白旄、之を揮ふこと塵の如し。商残を伐ち取り、周祜を開き篤くす。後世兵を談じ、之を宗とし祖と為す。

ほぼ『史記』斉太公世家に見える文章を引用すると思われるが、「断」文と〔已に仁義の兵法を寓す。〕〔兵法已に此に尽く。〕〔徳は尚敢て明らかに修めざるも、事殷んに至る。〕の「批注」は妥当な見解であろう。

四、執筆の動機

『広名将伝』の巻頭を飾る黄道周「原序」全文は次のように記す。(5)

名将一書、武の為にして設くるなり。既に武の為にして設くるときは、則ち名将中の知勇の在る所、夫の正の正為る、奇の奇為ると、必ず明明に点醒し、細細に拈出し、披閲の者をして、一覧して前人の用意を知り、以て後人の用意を発することを得借して、方に書を著すの大義に愧ぢず。倘し纂修に識無く、祇だ繁文を輯し、反て精要を遺さば、縦ひ三たび韋編を絶つとも、武に於て何の益あらん。此れ旧本の重軽するに足らざる所以なり。当今武を重んじ、英傑群興し、壇に登りて日月を摩き、箸を借りて風雲を談ぜんことを思はざる莫し。妙用は一心に在りと曰ふと雖も、何ぞ古を学ぶに至らんや。然れども事に必ず因有り、機は須らく触るるを待つべし。若し前人の已然の妙用を窺はざれば、何を以て吾心の将然の機を発し、宜しく師中の勝算を為すべきや。此を以て、名将の一書、武を用ゐる者の朝夕に離るるべからざるを知るなり。朝夕に離るるべからずして之を按ずるに茫として竅脈無く、又

且つ錯落多端なれば、烏乎んぞ可ならん。因りて取りて細に之を較べ、其の繁文を芟り、其の精要を出だし、再び妙に入り旁に批し、疑ひ有らば註を夾み、又総じて其の知勇の在る所を断結す。仍て是れ此の百数の英雄と雖も、祇だ一たび洗髪を経て、面目精神皆紙上に躍躍たるを覚ゆるのみにして、之を覧る者をして会心点首して、兵家の正の正為ること此の如く、奇の奇為ること此の如く、奇正の変動の窮むる無きことも亦た此の如きを悟らしむ。即ち衆を用ゐること如何、寡を用ゐること如何、巧久して如何、拙速して如何とするに至りては、胸中に了了たらざる莫し。而して諸を左右に取り、出でて戎を総べしめば、自ら百戦百勝にして、孫・呉に伯仲して復た多く譲らず、誠に武を用ゐるの先資なり。書成り、謹んで首に弁す。時に、崇禎癸未仲春、古閩の黄道周石斎甫めて題す。

崇禎癸未（十六年一六四三）三月に、黄道周は故郷の漳浦北山に帰り墓を守っている。この年は明朝崩壊の前年、黄道周の没年三年前に当たる。このような時代的背景と黄道周の生涯を、執筆動機として考慮すべきであろう。

黄道周の著述は非常に豊富で、『四庫全書』に収録されるものだけでも、『易象正十六巻』、『洪範明義四巻』、『月令明義四巻』、『表記集伝四巻』、『坊記集伝二巻附春秋問業一巻』、『緇衣集伝四巻』、『儒行集伝二巻』、『春秋揆一巻』、『孝経集伝四巻』以上経部、『榕壇問業十八巻』、『広名将譜十七巻』、『三易洞璣十六巻』以上子部、『西曹秋思一巻』以上集部の十三種を数える。これらの著述と比較すると、『広名将伝』（『広名将譜十七巻』）は必ずしも黄道周の最重要の書物ではないと思われる。しかしその「学術性と普及性の結合により、また本書の編成と明末の激烈な変動時期の社会的需要との密接さにより、本書の流伝と影響は他書を圧倒する著作である」[6]とされる。

一方、前掲書十三種以外に、黄道周の全集『黄漳浦集』の巻三十四に「懿畜前編上・下」、巻三十五に「懿畜後編」なる雑著がある。懿臣は忠臣の意、畜は留める意であることから、忠臣の伝記を留めた文章の意に解せる。明人三十人を収める「懿畜後編」と、『広名将伝』巻十八の明人十一人および巻十九の明人二十六人とを比較すると、重複するのは于謙と王陽明だけである。一つだけはっきり言えるのは、「懿畜後編」の最後に記す「舒脩撰（諱芬・字国裳）」には、舒氏の「（崇禎）甲申（一六四四）二月之疏」が引かれていることから、少なくとも「懿畜後編」の方が『広名将伝』より後に完成した文章である点である。[7]

両書とも文武両面から忠臣の伝記を執筆することを意図した著作であることは想像に難くないが、『広名将伝』をより正確に理解するためにも、さらに「懿畜前後編」と比較検討を加える必要がある。

注

(1) 注断の「注」とは、「旁批詳注」をいい、「断」とは、「断曰」以下に記す四言句の「賛」文をさす。但し書目文献社本には「旁批詳注」がない。なお、明代以前は「註」より「注」と書くのが普通である。

(2) 張慧剣編著『明清江蘇文人年表』(上海古籍出版社)に陳元素の記載が三件見える。

万暦三十九年—陳元素、在練川舟中、作墨蘭。
天啓元年—山東丁耀亢、此際在江南、与太倉趙宦光、長洲陳元素、華亭徐孚遠等締交。
崇禎三年—陳元素、作墨蘭巻。

また郭味蕖編『宋元明清書画家年表』(人民美術出版社)に記載が八件ある。

万暦三十四年—陳元素、応郷試不第。
万暦三十七年—陳元素、作墨蘭図。
万暦三十八年—陳元素、作墨蘭図。
万暦三十九年—陳元素、在練川舟中、作画。
万暦四十三年—陳元素為「石田先生集書序」。
万暦四十七年—陳元素、作墨蘭扇。故宮蔵。
崇禎元年—陳元素、作墨蘭巻。故宮蔵。
崇禎三年—陳元素、作墨蘭巻。

(3) 『四庫全書総目提要』は、「撰人の名氏を著さず。巻首に黄道周註断と題す。前に崇禎癸未の道周の序有り。即ち旧本は、其の繁文を芟り、其の精要を出だし、妙に入り旁に批し、疑ひ有らば註を夾み、又総じて其の知勇の在る所を断結すと称す。詞意弇陋にして、決して道周の手より出でず。」と記す。

(4) 崇禎十六年刊本(個人蔵)の原文と書目文献出版社本とでは文字に若干の異同がある。ここでは前者に従う。

(5) 前注4に同じ。なお書目文献出版社本は末文を「崇禎十六年、歳在癸未、漳浦黄道周石斎序。」に作る。

(6) 書目文献出版社本三六五頁の指摘による。

(7) 荘起儁編『漳浦黄先生年譜』巻上の崇禎七年の頃に、「先生、経を談ずるの余、屢屢人に史を読むことを勧む。嘗て歴代の史中に於て、漢自り宋迄の十二人を取り、人自ら伝を為し、二伝もて巻を為す。毎巻各の行事を以て相比し、『懿畜前編』と曰ふ。其の編は、則ち諸葛侯を首とし、而して鄴侯に終る。是れ以て先生の微意の存する所を窺ふべきなり。又明興りて以来を取り、楊文貞而下、二十四人を得、附見する所の者若干人、『懿畜後編』と曰ふ。」とあるが、前後編の執筆および完成にズレがあると考える。

(大東文化大学)